

傍らの妻へ

今田享三

千葉県・六七・無職

今さら恋文を書ける年齢でもあるまい。老いさらばえし己の戯れ言を
恥ずかしながら妻への恋文としたい。「妻」を「あなた」と読んでもら
うてもよし。

恋文コンテストの応募用紙は、妻と手話市民講座受講に図書館へ行つ
た折にもらった。その日講座からの帰り道、妻は習ったばかりの手話練

習で一所懸命。俺はこの恋文のことで少々不逞なことをば考えておった。
仮にもコンテストに応募するとしたら誰宛にだろう。自分の身の回りを
見渡した。誰もいない。恋文を書くひとが一人もいないということは、
俺の人生も終末か。それではあまりにも侘しい。元気だせよ。書けよ。
自問自答する。と、結局は傍らで手話練習に余念がない妻しかない。
うん。妻だ。

我々二人の年齢は妻が三つ若い。たった三つなのに妻は俺が先に逝く
ことに決めている。財産がないから先が勝ちではあろうが、俺には妻へ
打ち明けていない本心がある。本心とは、神仏が許すものならば、妻よ
り後から逝って、妻の死に水をとって上げたい。「縁起、くそが悪い」
と怒り給うな。真実本心なんだ。昔不安定な生活をしていた俺と結婚し
家計を支え、海外赴任の時は一緒に付いて来て共に苦勞をしてくれた。
ありがたかった。現在の平穏な老後人生があるのは、みんな妻のお陰が

あつたからだ。そのくせ俺はどれだけ妻を愛し尽くして上げただろうか。結婚以前地方へ住んでいた頃。酒は飲む賭け事はする男がいた。そいつの奥さんが亡くなって葬儀を手伝った。そんなぐうたら男が男泣きして死に顔へ語りかけて紅を差す光景は凄まじくもあり美しかった。そういう愛を崇拝しているのではない。ただ俺にも、そういう時にしか「愛してたよ」なんて告白出来ない気がするのだ。だから俺は妻よりも後から逝きたい。そして妻のために慟哭どうこくしたい。

*晩婚ですので、ただ今結婚三三年です。